

朝鮮

引揚げの記録

山形県 後藤 喜三次

昭和二十年八月八日未明、戸外の異様なざわめきに私はすぐ外へ飛び出した。連日の空襲に私達は着の身着のまま寝ていたのである。戸外の官舎街は右往左往する人の顔も判別出来ないほどの混雑である。

清津港沖に敵の艦船が来ているとの流言である。毎日のようにB 29の来襲を受けていたので米国の空母でも来たのかと思った。それにしてもウラジオストックに遠くない日本海の奥の港、清津に米国の空母がどうしているのかと思った。すぐ家に入ったら妻は、身支度をして、

生まれて二か月の長女を負い非常用のリュックを前に不安な顔をしていた。

連日の空襲に妻は江原道の田舎に開拓に来ている姉のもとへ疎開すべく前日から準備していたのである。

私は隣家の同僚小林君の家に行ってみた。小林君も様子を握りぬまま奥さんは身支度をしていた。そのうち、家族の者は全員、清津駅に集合し列車で南の方へたつようにと伝言があった。

私の妻と小林婦人はすぐ清津駅へ向かった。私と小林君はすぐに七百メートルほど離れた職場に急いで駆け付けた。

私達の職場は朝鮮総督府交通局清津埠頭局である。そこに着いて初めてソ連の参戦を知らされたのである。

突然砲弾のような音がした。私達は艦砲射撃が始まっ

たかと思つたが浜通りの清津警察署が自爆したのだとの情報がいっぱひ。海水浴場の方では機銃や散発の小銃らしい。羅南の残留兵が上陸するソ連兵と交戦しているのだった。間もなくソ連兵が間近に来てゐるとの情報に私達は事務所書類やら印鑑など重要なものを裏の防空壕に移し入り口を土嚢で塞いだ。少し離れた機関区からは火の手が上がっていた。私達は演習用の焼夷弾を持ち出し点火し事務所を焼こうとした。

そして全員駅のほうへ引き揚げた。私達が終戦を知つたのは八月二十日の朝である。山中をさまよつていたので終戦の詔勅も知らずにいた。十九日白岩線の白岩駅に着き駅前の集會場に泊まり翌朝、日本の無条件降伏を知らされたのである。

それから大放浪の旅が続いた。金も売る物もない、畠の白菜や大根を盗み、かじりながら歩いて三十八度線を越えるまでは、一緒に歩いてゐた人とも散り散りとなりまた何人かの友人が野垂れ死にした。

ようやく三十八度線を突破し米軍に保護されて内地に帰ることになった。釜山で乗船するときは外国へ連行さ

れるなどの噂も流れたが幸い着いたところは博多であつた。船上から青い島山が見えたときは全員が甲板に集まり万歳万歳を連呼した。皆の顔は涙に濡れ、なかには号泣する者もいた。誰からともなく「君が代」の合唱が沸き起こつた。

捕虜、脱走、無一文、悲劇引揚者

沖繩県 前花 哲雄

昭和五年一月現役徴兵で小倉歩兵十四連隊に入営し、翌六年七月帰休満期で予備役編入となつた。不況で帰郷をやめ、熊本の巡查看守憲兵等受験塾に入所二か月勉強した。当時朝鮮総督府では毎月第三日曜日に巡查募集試験があつたので京城に行き受験した。不況で大学卒業者等多く千五百人中二十五人の合格で翌七年四月警察官拝命、講習後平安北道出向、鴨緑江岸国境警備勤務についた。昭和十五年任警部補、新義州警察に勤務し、同十八年平安南道出向、道警察部に勤務した。戦時中敵機は数